

小学校教員養成課程学生における器械運動の技の習得状況 —2018年—

中野裕史 田村孝洋

The Acquisition Degree of Gymnastics Skills in Elementary School Teacher Training Course Students — Report of 2018 —

Hiroshi Nakano Takahiro Tamura

(2018年11月22日受理)

緒言

中央教育審議会による2016（平成28）年12月21日の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を踏まえ、2017（平成29）年3月31日に学校教育法施行規則が改正されるとともに、小学校学習指導要領が公示され、2020（平成32）年4月1日から全面实施されることとなった。

平成29年告示の学習指導要領解説体育編（以下、新指導要領）において、体育科の器械運動の領域は従前どおり第3学年からマット運動、鉄棒運動、跳び箱運動で構成されているが、マット運動は回転系（接転技群：前転・後転グループ技、ほん転技群：倒立回転・はね起きグループ技）と巧技系（平均立ち技群：倒立グループ技）に、鉄棒運動は支持系（前方支持回転技群：前転・前方足掛け回転グループ技、後方支持回転技群：後転・後方足掛け回転グループ技）に、跳び箱運動は切り返し系（切り返し跳びグループ技）と回転系（回転跳びグループ技）に再編されている（文部科学省、2017）。

器械運動は、「できる」、「できない」がはっきりした運動であることから、全ての児童が技を身に付ける楽しさや喜びを味わうことができるよう（文部科学省、2017）に指導することが求められているが、全ての児童が学習指導要領解説の例示技を身に付けているわけではない（小畑ほか、2012；高橋、2010）。残念ながら、将来、児童・生徒を指導する教員養成課程の学生においても、全ての学生が例示技を「できる」わけではなく、習得率の高い技と低い技がみられる（石井、2012；嘉数ほか、2010；川島、2017；久木ほか、2009；小倉、

2017；佐藤ほか、1986）。技の習得基準は学習者の70%が「できる」とされているが（高橋、2010）、はたして、本学の小学校教員養成課程の学生は、新指導要領に例示されている器械運動の技を「できる」のだろうか。

本研究では、今後のカリキュラム・マネジメントに向けて本学の小学校教員養成課程の学生における器械運動の技の習得状況を明らかにすることを目的とした。

方法

1. 対象者

小学校教諭一種免許状の選択必修科目である「体育A」を受講した本学教育学部2年生の内、外傷・障害がなく運動可能な126名（男子学生41名、女子学生85名）を対象とした。

2. 授業内容

15回の授業の内、6回を器械運動に充て、1班当たり6～8名の班別学習を実施した。1回目の授業で新指導要領に例示されている技を提示し、小学校と中学校ですでに学習した現行の学習指導要領解説（以下、現行指導要領）に例示されている技の復習を兼ねて練習した。毎回の授業は健康観察、学習課題の確認、準備運動、器械・器具の準備、班別学習と技能評価、用具の片付け、整理運動、学習の振り返り（学習カードへの自己評価記入、学びの発表と共有）で構成されており、各班に2台iPadを配布し、技の示範動画の閲覧や各自の演技を動画撮影して動きの確認修正を行った。また、随時、担当教員が技や練習方法のアドバイスをを行った。

3. 技能評価

技能評価は、学生の申告により授業中に随時実施し、一人当たりの回数も無制限とした。担当教員が演技を目視することによって「できる」、「できない」の2段階で評価し、現行・新学習指導要領と先行研究（中野・田村，2017）を参考に作成した技のポイント（表1～3）がすべてできている場合を「できる」と評価した。「できない」場合は、できないポイントを指摘し、再度練習を行わせた。技が「できる」学生の割合を習得率として男女別に算出し、対象者の70%が「できる」ことを習得基準とした。

4. 統計処理

統計処理にはSPSS Statistics Ver.21を用い、有意水準は $p < 0.05$ とした。

結果と考察

1. マット運動

新指導要領におけるマット運動の例示技の習得率を図1に示した。 χ^2 検定の結果、男子学生と女子学生で技の習得率に相違が認められた。

男子学生の習得率が女子学生よりも高い技は、前転グループの補助倒立前転 ($\chi^2 = 1.613$, $df = 1$, $p < 0.05$)、倒立前転 ($\chi^2 = 15.275$, $df = 1$, $p < 0.001$)、跳び前転 ($\chi^2 = 29.042$, $df = 1$, $p < 0.001$)、伸膝前転（易しい場） ($\chi^2 = 8.565$, $df = 1$, $p < 0.005$)、後転グループの伸膝後転 ($\chi^2 = 6.553$, $df = 1$, $p < 0.05$) と後転倒立 ($\chi^2 = 8.565$, $df = 1$, $p < 0.005$)、倒立回転グループの前方倒立回転跳び ($\chi^2 = 5.309$, $df = 1$, $p < 0.05$)、はね起きグループの首はね起き ($\chi^2 = 22.214$, $df = 1$, $p < 0.001$) と頭はね起き ($\chi^2 = 13.061$, $df = 1$, $p < 0.001$)、倒立グループの頭倒立 ($\chi^2 = 20.456$, $df = 1$, $p < 0.001$) と倒立 ($\chi^2 = 7.231$, $df = 1$, $p < 0.01$) であった。逆に、女子学生の習得率が男子学生よりも高い技は、前転グループの開脚前転（易しい場） ($\chi^2 = 10.442$, $df = 1$, $p < 0.005$) と開脚前転 ($\chi^2 = 9.314$, $df = 1$, $p < 0.005$) であった。なお、男子学生と女子学生の習得率に有意差がみられない技は、前転グループの前転、後転グループの後転と開脚後転、倒立回転グループの補助倒立ブリッジ、側方倒立回転、倒立ブリッジ、ロンダート、前方倒立回転、倒立グループの壁倒立と補助倒立であった。

男子学生と女子学生の習得率の相違の要因については調査していないが、男子学生は筋力を必要とする技の習得率が高く、女子学生は柔軟性を必要とする技の習得率が高いことから、筋力と柔軟性の相違が関係しているの

かもしれない。

男子学生で70%の習得基準を達成している技は、習得率の高い順に、前転（95.1%）、後転（85.4%）、補助倒立（82.9%）、壁倒立（75.6%）、補助倒立前転（75.6%）、跳び前転（75.6%）の6種目であった。一方、女子学生で70%の習得基準を達成している技は、習得率の高い順に、前転（98.8%）、開脚前転（易しい場）（84.7%）、開脚前転（83.5%）、補助倒立（80.0%）、開脚後転（75.3%）、後転（71.8%）、壁倒立（70.6%）の7種目であった。前転グループ及び後転グループで男女ともに基準に達している技は、基本技の前転と後転のみであった。女子学生では開脚前転（易しい場）、開脚前転、開脚後転の3種目で基準に達しているが、男子学生では前屈の柔軟性が低く、膝を伸ばしたまま立ち上がれない者が多いことから3種目とも基準に達することができていなかった。倒立グループで男女ともに基準に達している技は、基本技の壁倒立と発展技の補助倒立であった。女子学生は補助倒立で基準に達しているが、前に倒れながら腕を曲げて前転へ移行できない者がおり、前転グループの補助倒立前転では基準に達することができていなかった。残念ながら、男女ともに倒立回転グループ及びはね起きグループで基準に達している技はみられなかった。

6回にわたる本授業で習得基準に達しなかった技の多くは、そもそも小学校、中学校、高等学校で十分な学習がなされていなかったと考えられ、最低限でも基本技の習得基準を達成させるカリキュラムが必要と思われる。

2. 鉄棒運動

新指導要領における鉄棒運動の例示技の習得率を図2に示した。 χ^2 検定の結果、男子学生と女子学生で技の習得率に相違が認められた。

男子学生の習得率が女子学生よりも高い技は、前転グループの前回り下り ($\chi^2 = 11.673$, $df = 1$, $p < 0.005$)、前方支持回転 ($\chi^2 = 6.371$, $df = 1$, $p < 0.05$)、横とび越し下り ($\chi^2 = 8.565$, $df = 1$, $p < 0.005$)、前方足掛け回転グループの膝掛け振り上がり ($\chi^2 = 5.880$, $df = 1$, $p < 0.05$) と前方片膝掛け回転 ($\chi^2 = 5.309$, $df = 1$, $p < 0.05$)、後転グループの補助逆上がり ($\chi^2 = 9.888$, $df = 1$, $p < 0.005$)、逆上がり ($\chi^2 = 15.886$, $df = 1$, $p < 0.001$)、後方支持回転 ($\chi^2 = 5.142$, $df = 1$, $p < 0.05$) であった。逆に、女子学生の習得率が男子学生よりも高い技はなかった。なお、男子学生と女子学生の習得率に有意差がみられない技は、前転グループのかかえ込み前回り、転向前下り、片足踏み越し下り、前方伸膝支持回転、前方足掛け回転グループの膝掛け上がり、前方もも掛け回転、もも掛け上がり、後転グループ

表1. マット運動における技のポイント

| 難度 | 技 | ポイント |
|-----------------|-------------|--|
| 基本的な技 (中学年) | 前転 | マットを蹴って腰を上げながら両手のひらを着手している。 回転中に足をそろえ、膝が伸びている。 足が接地する直前に膝を曲げ、足をお尻に引き寄せている。 膝を閉じて手を着かずに立ち上がり、静止できる。 |
| | 開脚前転 (易しい場) | 傾斜をつくった場で、 前転を行うように回転し、かかとが接地する直前に膝を伸ばしたまま足を開いている。 かかとの接地と同時に両手のひらを股の近くに置いて押し、膝を伸ばしたまま立ち上がり、静止できる。 |
| | 後転 | お尻を遠くに着けている。 脇を閉じて両手のひらで着手している。 回転中に足をそろえ、膝が伸びている。 つま先が接地する直前に膝を曲げ、足を頭に引き寄せている。 つま先の接地と同時に両手で押して、膝を閉じて立ち上がり、静止できる。 |
| | 開脚後転 | 後転を行うように回転し、つま先が接地する直前に膝を伸ばしたまま足を開いている。 つま先の接地と同時に両手で押して、膝を伸ばしたまま立ち上がり、静止できる。 |
| | 補助倒立ブリッジ | 壁倒立を行うように倒立し、補助者による背中の支えで前方へ体を反らせ、ゆっくりと足を下ろしながらブリッジの姿勢で静止できる。 |
| | 側方倒立回転 | 正面を向き、前足と両手を前方に振り下ろしながら、後ろ足を振り上げている。 前足のつま先が進行方向を向いている。 体を1/4ひねりながら前足と同じ側の手のひらから片手ずつ直線上に着手している。 両手の間を見ながら足を開いた姿勢で側方回転している。 後ろ足から片手ずつ振り下ろして直線上に着地し、静止できる。 |
| | 首はね起き | 前転を行うように回転し、両肩へ背中がマットについた時に腕と腰を伸ばし、体を反らせながらはね起きて静止できる。 |
| | 壁倒立 | 壁に向かって、 前足と両手を前方に振り下ろしながら、後ろ足を振り上げている。 両手の間を見ながら両手を着いている。 足をそろえて、体を真っ直ぐに伸ばしている。 壁に足をもたれかけて2秒静止できる。 |
| | 頭倒立 | 三角形をつくるように頭と両手を着いている。 腰を上げ、足をそろえてゆっくりと上に伸ばし、体を真っ直ぐに伸ばして2秒静止できる。 |
| 発展技 (中・高学年) | 補助倒立前転 | 補助倒立を行い、前に倒れながら腕を曲げ、頭を入れて前転できる。 |
| | 開脚前転 | 傾斜なしで開脚前転ができる。 |
| | 伸膝後転 | 膝を伸ばしたまま前屈しながら後方へ倒れ、お尻を着くことができる。 脇を閉じて両手のひらで着手し、回転中に足をそろえ膝が伸びている。 つま先の接地と同時に両手で押して、膝を伸ばしたまま立ち上がり、静止できる。 |
| | 倒立ブリッジ | 補助者なしで倒立ブリッジができる。 |
| | ロンダート | 助走からホップしている。 側方倒立回転を行うように回転し、両足を真上でそろえ、両手で突き放している。 空中で体を1/4ひねりながら両足を振り下ろして着地し、静止できる。 |
| | 頭はね起き | 頭倒立を行いながら前方に回転し、お尻が頭を越えたら腕と腰を伸ばし、体を反らせながらはね起きて静止できる。 |
| | 補助倒立 | 壁倒立を行うように倒立し、補助者による両足の支えで2秒静止できる。 |
| 更なる発展技 (高学年) | 倒立前転 | 補助なしで倒立前転ができる。 |
| | 跳び前転 | 両手を前方に振り上げながらマットを蹴って遠くに跳んでいる。 空中で足をそろえて膝を伸ばしている。 着手と同時に腕を曲げ、頭を入れて前転できる。 |
| | 伸膝前転 (易しい場) | 傾斜をつくった場で、 前転を行うように回転し、かかとの接地と同時に両手のひらを体側に置いて、膝を伸ばしたまま立ち上がり、静止できる。 |
| | 後転倒立 | 後転を行うように回転し、腕を伸ばしながら倒立を経過して立ち上がり、静止できる。 |
| | 前方倒立回転 | 倒立ブリッジを行うように回転し、ブリッジの姿勢を経過し、両手を押し立て立ち上がり、静止できる。 |
| | 前方倒立回転跳び | 助走からホップしている。 前方倒立回転を行うように回転し、着地前に両手を突き放して立ち上がり、静止できる。 |
| | 倒立 | 補助なしで倒立ができる。 |

表2. 鉄棒運動における技のポイント

| 難度 | 技 | ポイント |
|-----------------|-----------|--|
| 基本的な技 (中学年) | 前回り下り | 支持の姿勢から、 前方へ上体を大きく振り出し、腰を曲げたまま回転している。 両足をそろえて開始した側に着地できる。 |
| | かかえ込み前回り | 支持の姿勢から、 腰を曲げながら上体を前方へ倒し、両手で腿の後ろを抱え込んで1回転し、支持の姿勢に戻り、静止できる。 |
| | 転向前下り | 前後開脚の支持の姿勢から、 鉄棒に掛けた足と同じ側の手を逆手に持ちかかえている。 反対側の手を放しながら後ろの足を鉄棒に触れずに前に出している。 逆手は鉄棒を握ったまま、両足をそろえて横向きに着地できる。 |
| | 膝掛け振り上がり | 片膝を鉄棒に掛けてぶら下がった姿勢から、 腕を曲げて体を鉄棒に引きつけながら、掛けていない足を前後に大きく振っている。 振動に合わせて上体を前方へ起こしながら回転し、手首を返しながらか鉄棒に上がり、静止できる。 |
| | 前方片膝掛け回転 | 前後開脚の支持の姿勢から、 逆手に持ちかかえている。 前方へ上体を大きく振り出し、膝を掛けて1回転している。 手首を返しながらか前後開脚の支持の姿勢に戻り、静止できる。 |
| | 補助逆上がり | 補助や補助具を利用した条件で、 後ろ足の振り上げとともに腕を曲げ、上体を後方へ倒しながら回転している。 手首を返しながらか鉄棒に上がり、静止できる。 |
| | かかえ込み後ろ回り | 支持の姿勢から、 腰を曲げながら上体を後方へ倒し、両手で腿の後ろを抱え込んで1回転し、支持の姿勢に戻り、静止できる。 |
| | 後方片膝掛け回転 | 前後開脚の支持の姿勢から、 後方へ上体と後ろ足を大きく振り出し、片膝を掛けて1回転している。 手首を返しながらか前後開脚の支持の姿勢に戻り、静止できる。 |
| | 両膝掛け倒立下り | 鉄棒に両膝を掛けてぶら下がった姿勢から、 両手を鉄棒から放して地面に着き、鉄棒より前へ両手を移動して倒立の姿勢になっている。 両膝を鉄棒から外し、鉄棒より前へ着地して立ち上がれる。 |
| 発展技 (中・高学年) | 前方支持回転 | 支持の姿勢から、 腰と膝を曲げながら体を前方に勢いよく倒し、腹を掛けて1回転している。 手首を返しながらか支持の姿勢に戻り、静止できる。 |
| | 片足踏み越し下り | 支持の姿勢から、 片逆手に持ちかかえている。 順手の外側近くに順手と同側の足を鉄棒に乗せている。 踏み込みながら順手を放し、後ろの足を鉄棒に触れずに前に出している。 逆手は鉄棒を握ったまま、両足をそろえて横向きに着地できる。 |
| | 膝掛け上がり | 地面を蹴って、両足を前方へ振り上げている。 振れ戻りながら片膝を掛け、手首を返しながらか鉄棒に上がり、静止できる。 |
| | 前方もも掛け回転 | 前後開脚の支持の姿勢から、逆手に持ちかかえている。 前方へ上体を大きく振り出し、足を伸ばし鉄棒を挟むように1回転している。 手首を返しながらかももを掛けて前後開脚の支持の姿勢に戻り、静止できる。 |
| | 逆上がり | 補助なしで逆上がりができる。 |
| | 後方支持回転 | 支持の姿勢から、 腰と膝を曲げながら体を後方に勢いよく倒し、腹を掛けて1回転している。 手首を返しながらか支持の姿勢に戻り、静止できる。 |
| | 後方もも掛け回転 | 前後開脚の支持の姿勢から、 後方へ上体と後ろ足を大きく振り出し、ももを掛けて1回転している。 手首を返しながらか前後開脚の支持の姿勢に戻ること。 |
| | 両膝掛け振動下り | 鉄棒に両膝を掛けてぶら下がった姿勢から、 両手を鉄棒から放し、腕と頭を使って体を前後に振っている。振動に合わせて両膝を鉄棒から外し、鉄棒より前へ着地して立ち上がれる。 |
| 更なる発展技 (高学年) | 前方伸膝支持回転 | 足をそろえ、膝を伸ばして前方支持回転ができる。 |
| | 横とび越し下り | 支持の姿勢から、 片逆手に持ちかかえている。 両足をそろえて順手側に振り上げている。 順手を放しながら両足を鉄棒に触れずに前に出している。 逆手は鉄棒を握ったまま、両足をそろえて横向きに着地できる。 |
| | もも掛け上がり | 地面を蹴って、両足を前方へ振り上げている。 振れ戻りながらももを掛け、手首を返しながらか鉄棒に上がり、静止できる。 |
| | 後方伸膝支持回転 | 足をそろえ、膝を伸ばして後方支持回転ができる。 |

表3. 跳び箱運動における技のポイント

| 難度 | 技 | ポイント |
|-----------------|------------|--|
| 基本的な技 (中学年) | 開脚跳び | 助走して両足で踏み切っている。 両手のひらを着手し、膝を伸ばして足を左右に開き、前屈して跳び越えている。 着地で静止できる。 |
| | 台上前転 | 助走して両足で踏み切っている。 腰を上げながら両手のひらを着手し、前方に回転している。 着地で静止できる。 |
| | 首はね跳び | 助走して両足で踏み切っている。 跳び箱で首はね跳びを行うように回転し、着地で静止できる。 |
| 発展技 (中・高学年) | かかえ込み跳び | 助走して両足で踏み切っている。 両手のひらを着手し、膝を曲げ、足をかかえ込んで跳び越えている。 着地前に両手が跳び箱から離れている。 着地で静止できる。 |
| | 伸膝台上前転 | 足をそろえ、膝を伸ばしたまま台上前転ができる。 |
| | 頭はね跳び | 助走して両足で踏み切っている。 跳び箱で頭はね跳びを行うように回転し、着地で静止できる。 |
| 更なる発展技 (高学年) | 屈身跳び | 助走して両足で踏み切っている。 両手のひらを着手し、膝を伸ばして足をそろえ、前屈して跳び越えている。 着地前に両手が跳び箱から離れている。 着地で静止できる。 |
| | 前方屈腕倒立回転跳び | 助走して両足で踏み切っている。 腕を曲げて倒立を行いながら前方に回転し、足が頭を越えたら腕を伸ばし、体を反らせながらはね起きている。 着地で静止できる。 |

のかかえ込み後ろ回りと後方伸膝支持回転、後方足掛け回転グループの後方片膝掛け回転、両膝掛け倒立下り、後方もも掛け回転、両膝掛け振動下りであった。

男子学生と女子学生の習得率の相違の要因については調査していないが、女子学生では鉄棒にぶら下がれない、鉄棒上で支持できない者もいることから、筋力の相違が関係しているのかもしれない。

男子学生において70%の習得基準を達成している技は、習得率の高い順に、補助逆上がり(95.1%)、逆上がり(92.7%)、転向前下り(75.6%)の3種目であった。一方、女子学生において70%の習得基準を達成している技は、習得率の高い順に、転向前下り(76.5%)、補助逆上がり(70.6%)の2種目であった。前転グループ及び後転グループで男女ともに基準に達している技は、基本技の転向前下りと補助逆上りのみであった。転向前下りは、現行指導要領の例示技でもあるため小学校で学習済みのはずであるが、多くの学生が今回の授業で初めて学習するようであった。しかし、運動構造が単純なため、本授業の練習で容易に習得基準に達したと考えられる。逆上がりは男子学生で基準に達しているが、女子学生では補助なしで上がれない者がおり、基準に達することができていなかった。男女ともに前方足掛け回転グループ及び後方足掛け回転グループで基準に達している技はみられなかった。

残念ながら、鉄棒運動の技の多くで習得率が低く、6回にわたる本授業で習得基準に達しなかった技の多くは、そもそも小学校、中学校、高等学校で十分な学習がなされておらず、さらに、逆上りに偏った学習がなさ

れていたと考えられる。最低限でも基本技の習得基準を達成させるカリキュラムが必要と思われる。

3. 跳び箱運動

新指導要領における跳び箱運動の例示技の習得率を図3に示した。 χ^2 検定の結果、男子学生と女子学生で技の習得率に相違が認められた。

男子学生の習得率が女子学生よりも高い技は、切り返し跳びグループのかかえ込み跳び($\chi^2 = 33.310$, $df = 1$, $p < 0.001$)と屈伸跳び($\chi^2 = 6.371$, $df = 1$, $p < 0.05$)、回転跳びグループの台上前転($\chi^2 = 7.287$, $df = 1$, $p < 0.01$)、首はね跳び($\chi^2 = 15.052$, $df = 1$, $p < 0.001$)、頭はね跳び($\chi^2 = 17.908$, $df = 1$, $p < 0.001$)、前方屈腕倒立回転跳び($\chi^2 = 13.061$, $df = 1$, $p < 0.001$)であった。逆に、女子学生の習得率が男子学生よりも高い技はなかった。なお、男子学生と女子学生の習得率に有意差がみられない技は、切り返し跳びグループの開脚跳び、回転跳びグループの伸膝台上前転であった。

男子学生と女子学生の習得率の相違の要因については調査していないが、男子学生では筋力と跳躍力を必要とする技の習得率が高いことから、筋力と跳躍力の相違が関係しているのかもしれない。

男子学生において70%の習得基準を達成している技は、習得率の高い順に、開脚跳び(97.6%)、台上前転(95.1%)、かかえ込み跳び(87.8%)の3種目であった。女子学生において70%の習得基準を達成している技は、習得率の高い順に、開脚跳び(89.4%)、台上前

転（75.3%）の2種目であった。切り返し跳びグループ及び回転跳びグループで男女ともに基準に達している技は、基本技の開脚跳びと台上前転のみであった。かかえ込み跳びは男子学生で基準に達しているが、女子学生では習得率が低かった。

6回にわたる本授業で習得基準に達しなかった技の多くは、そもそも小学校、中学校、高等学校で十分な学習がなされていなかったと考えられ、最低限でも基本技の習得基準を達成させるカリキュラムが必要と思われる。

まとめ

本学の小学校教員養成課程の学生126名（男子学生41名，女子学生85名）を対象に，平成29年告示の学習指導要領解説に例示されている器械運動の技の習得状況を調査した。

男子学生において70%の習得基準を達成している技は，マット運動で6種目，鉄棒運動で3種目，跳び箱運動で3種目であった。女子学生において70%の習得基準を達成している技は，マット運動で7種目，鉄棒運動で2種目，跳び箱運動で2種目であった。男女ともに基

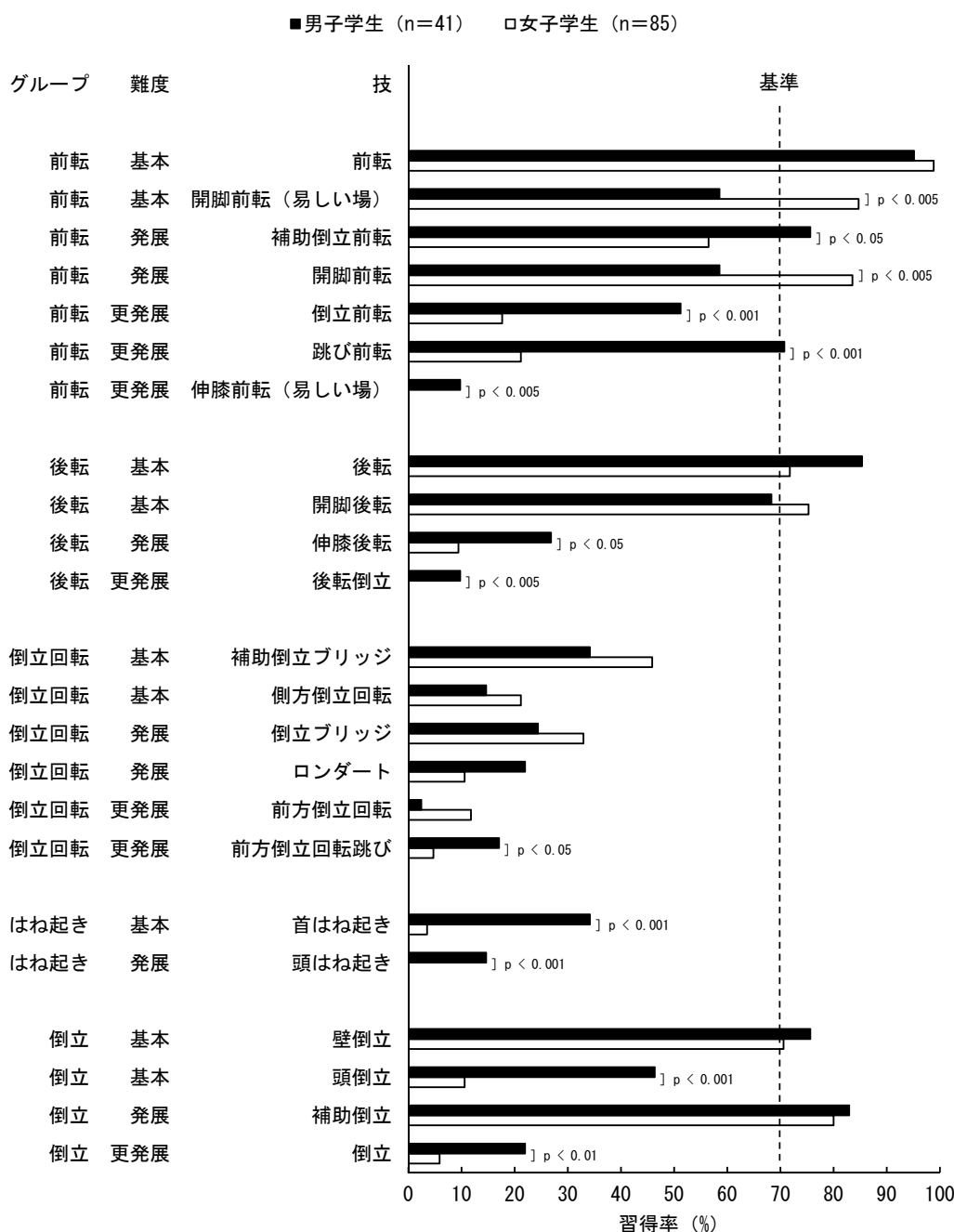


図1. マット運動における技の習得率

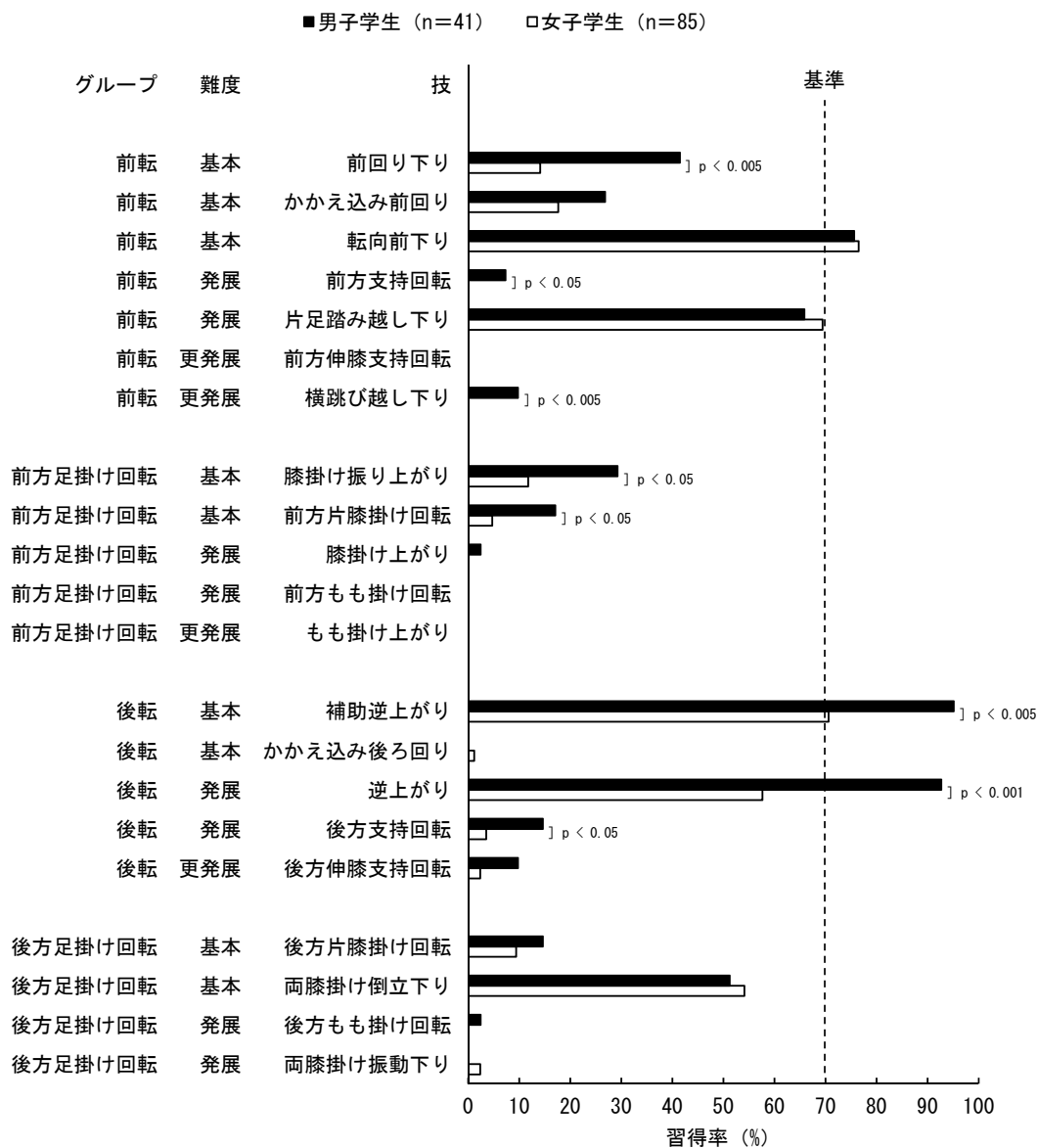


図2. 鉄棒運動における技の習得率

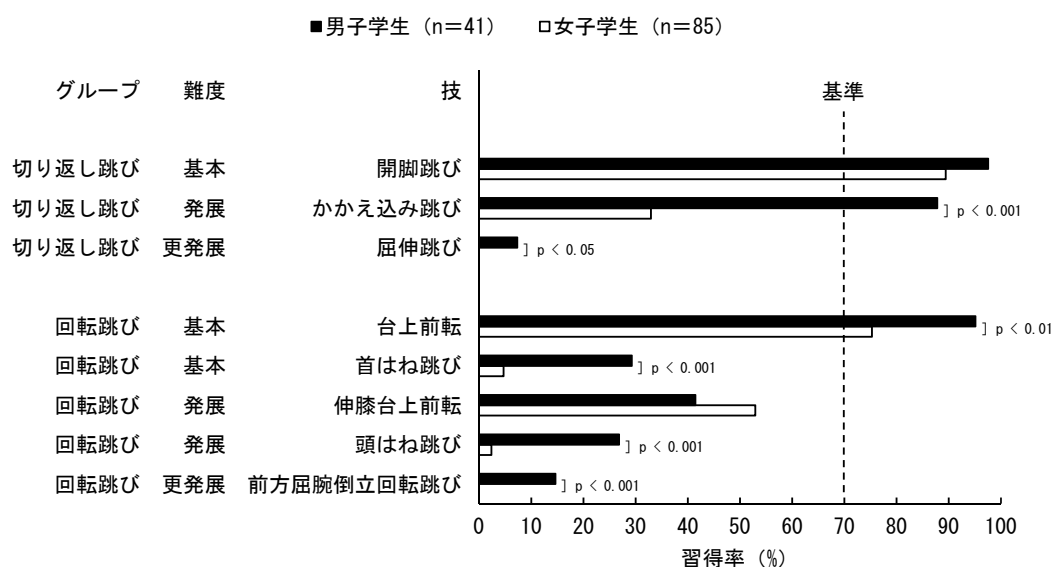


図3. 跳び箱運動における技の習得率

準に達している技は、マット運動では前転、後転、壁倒立、補助倒立の4種目、鉄棒運動では転向前下りと補助逆上りの2種目、跳び箱運動では開脚跳びと台上前転の2種目であった。

本研究では技能評価を2段階とした。先行研究（石井，2012；嘉数ほか，2010；川島，2017；久木ほか，2009；小倉，2017；佐藤ほか，1986）もそれぞれ評価方法や評価ポイントが異なるため、残念ながら、技の習得率の比較は単純にできない。しかし、全ての学生が例示技を「できる」わけではなく、習得率の高い技と低い技がみられたことは先行研究と一致していた。このことから、初等・中等教育で学習した技に偏りが生じていたことが考えられるとともに、学習が不十分だった技は、未習得のまま現在に至っていることが考えられる。このような状態で小学校教員に採用された場合、負の連鎖が生じることは容易に想像できる。この連鎖を断つ方策の一つとして、初等・中等教育での器械運動の学習状況を注視しながら、継続的に技の習得率の調査を実施し、教員養成校においてもカリキュラム・マネジメントを具体化していく必要があると考えられる。

文 献

- 石井裕明（2012）器械運動における技達成度と授業の志向性について．東北文教大学東北文教大学短期大学部教育研究，3：9-19.
- 嘉数健悟・岩田昌太郎・竹内俊介・二宮垂紀子（2010）保健体育教師志望学生の器械運動における技能の達成度に関する事例研究．広島大学大学院教育学研究科紀要，第二部，文化教育開発関連領域，59：337-343.
- 川島均（2017）器械運動の授業運営について．教育総合研究，1：247-258.
- 久木直哉・斉藤大裕・堀江健二・小林幸子（2009）器械運動の技の習得に関する研究，体育・スポーツ科学研究，9：61-76.
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説体育編．
- 中野裕史・田村孝洋（2017）ICTを活用した授業形態が器械運動の学習成果に及ぼす影響．中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要，49：91-95.
- 小畑治・岡澤祥訓・石川元美・森本寿子（2012）小学校体育科における器械運動の『技の配列表』作成の試み—鉄棒運動及びマット運動について—．奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要，21：239-244.
- 小倉晃布（2017）保健体育教員養成課程の器械運動における指導法の改善に関する研究—大学生の課題達成度に着目して—．岡山体育学研究，24：23-29.

- 佐藤徹・鈴木博・米谷元捷・田中和久・新開谷央・志手典之（1986）教員養成大学学生の小学校体育教材の達成度について（その1）—器械運動—．北海道教育大学紀要（第2部C），37：23-33.
- 高橋健夫（研究代表）（2010）体育科のナショナルスタンダード策定の試みとその妥当性の検証．科学研究費補助金研究成果報告書．